260　当院での骨シンチグラフィにおける転移性腫瘍の検討

瀧島輝雄、町田喜久雄、本田憲業、間宮敏雄、高橋卓、釜野剛、長谷川典子、大野研（埼玉医科大学総合医療センター・放射線科）

骨シンチグラフィは、病巣への血流と骨代謝の状態を示す動態を反映しており、骨炎症性疾患，骨折，関節炎，代謝性疾患はもとより原発および続発性腫瘍の検出に広く応用され、有用性についても報告されている。当院では、1986年３月より核医学検査を開始し、1989年３月までの３年間に行った全シンチグラフィ中 950件(26.6%)の骨シンチグラフィを施行した。これらのうち骨転移の多いとされる乳癌，前立腺癌を中心に各種腫瘍疾患の病期分類別，手術から初発までの期間，部位，病理組織別，治療方法との関係について検討した。また、第26回総会で報告したSPECT の応用についても症例呈示する。

261　横紋筋融解症のシンチグラフィー所見

相澤信行、原　芳邦（湘南鎌倉病院内科）　明石恒浩、亀井徹正、内山富士雄（茅ヶ崎徳洲会総合病院）　三井民人、山崎愉紀（同放射線科）　鈴木　豊（東海大学放射線科Ⅰ）

臨床的に横紋筋融解症と診断した14症例に対し^{99m}Tc-燐酸塩によるシンチグラフィーを施行した。最高血清CK値の平均は37800IU/L。12例に異常集積が認められ、障害された筋に一致したと判断した。10例には腎にも異常集積があった。異常集積のない2例のCK値は2960,7600であり、横紋筋融解症は比較的緩徐にきていた。腎への集積はTcで標識されたミオグロビン等が尿細管に停留したものと考えられた。以上より、^{99m}Tc-燐酸塩によるシンチグラフィーは、急性で比較的重症の横紋筋融解症の症例に障害された筋と腎に一致して異常集積を生じ、障害部位と程度を画像的に判断でき、有用な方法と考えられた。

262　骨髄炎における核医学診断の再検討

今　結賀、石川演美、武田　徹、佐藤始広、中島光太郎、秋貞雅祥（筑波大学放射線科）

骨髄炎の活動性の評価について核医学的診断法の再評価を行った。

当院で過去５年間に骨髄炎で検査を施行した18例をretrospectiveに、単純Ｘ-Ｐ、骨シンチグラム、Ga-67シンチグラム、手術所見および臨床所見において病変の範囲と性質、活動性の有無などを比較し各検査法の有用性を考察した。

骨シンチは病変の検出に関し高い sensitivityを示し、全例で集積が認められた。臨床的に治癒とされた症例でも強い集積の遷延がみられた。しかし集積に不均一があるときおよび Ga-67 シンチで中等度以上の集積は活動性に相関していると考えられた。

263　片側性股関節疾患における^{99m}Ｔｃ－ＭＤＰの患側大腿骨骨幹部への取り込み亢進について

小林英敏、田中孝二（岐阜県立多治見病院　放射線科）

昭和６０年４月から平成元年４月までに岐阜県立多治見病院にて、3-phase骨シンチを施行した片側性股関節疾患症例７７例（８８検査）を対象として^{99m}Ｔｃ－ＭＤＰの大腿骨骨幹部への取り込みを健側と患側とで比較した。対象は、頚部骨折２１例（２８検査）、大腿骨頭壊死（ペルテスを含む）１８例（１９検査）、脱臼６例（７検査）左側変形性股関節症１５例（１７検査）、右側変形性股関節症１７例（１７検査）である。骨髄炎等の感染性疾患が疑われる症例、骨幹部の病変が疑われる症例や転移の疑いのある症例は除外した。患部への取り込みは６０例で亢進していた。取り込みの亢進の程度は、病歴で見ると患部の不使用に関連し、3-phase検査でみると患側下肢の萎縮との関連が考えられた。

264　脊椎固定術後の骨シンチグラムの推移

清水正人，大森薫雄，勝又壮一，中村信之，山下和郎，舟崎裕記（神奈川県立厚木病院整形外科）服部文夫（同放射線科）

腰痛を来す疾患のうち脊柱の支持性に問題がある場合，椎弓切除術とともに後側方固定術，あるいは前方固定術をおこなっている。今回われわれは術前，術後の骨シンチグラフィーの推移について検討したので報告する。

対象および方法：症例は男１２例，女３例，計２５症例で，その平均年令は４５.４才であった。骨シンチグラフィーは術後１ケ月，３ケ月，６ケ月，１年，２年で施行し，その平均追跡期間は２年２ケ月であった。

結果：順調な経過をとった症例では，術後３ケ月で集積の増強がみられ，以後集積の減弱，限局化，消失がみられた。中には経過の中で集積の増強をみる症例があった。

265　骨疾患の時間放射能曲線の検討

伊場　昭三，大曽根　文雄，二見　務，小谷　庸一　有賀　明子，平田　貴，川名　正直（帝京大市原病院放射線科）

骨疾患の診断に使用する^{99m}Tc-MDP は骨に集積する放射能比が優れているが、静態像のみから疾患の鑑別や集積経過を量的に評価することは難しい。我々は、ボーラス注入した^{99m}Tc-MDP の動態を示した時間放射能曲線から、骨の正常異常に相違があるか検討をした結果、注入早期の静態像で知ることの困難な骨疾患を、時間放射能曲線から疾患の有無の相違を注入早期のカーブの形態で知れた。又、罹患骨の中でも集積カーブに差のあることも知れた。集積カーブから異常集積が、骨代謝の亢進か血流因子によるかと、腎描出像との関係についても検討をする。

Presented by Medical*Online